

つながりとしてのレジャー論

住居にみる環境・象徴の再生の可能性

犬塚潤一郎 [実践女子大学]

労働の今日性と分化

概念としてレジャーは労働と対の関係にある。そして労働の意味内容が時代と社会において変化するに応じて、レジャーの社会的意義も変化してきた。その意味では、レジャーとは何かを考えることは、自分が属する社会に対して価値生産の視点から批判を行うことに相当してきたのである。

今日の社会における労働観は、人間の生存のために不可欠なものを獲得するための苦役という意味や、倫理観と結びついた職業、あるいは新たな価値を生み出す創造的な仕事といった、それぞれ歴史的な概念の複合によるものであって、場面によってそれぞれの異なる姿を現わしている。

さらに今日の社会に特有なことは、労働が人間の生活の一部を占めるだけでなく、その構造的な特徴である“分化”が、人間のあり方の全体的な傾向を支配していることである。

今日のほとんどあらゆる業種において、個人が携わる範囲での労働の内容に結構としての全体性を見いだすことができなくなっている。それは人間の労働がその原初の時代より社会的な分業を特徴としてきたであろうこととは異なる、質的な変化をこの会社中心の社会がもたらしたものと考えることができるだろう。

それは工業時代にみられた人間の部品化がいつそう進んだ結果というよりは、会社組織の具体的なあり方そのものが流動化し、変化する外環境に速やかに対応する柔軟性を特徴とするようになってきたためである。会社型の個人には、ある部分の機能を果たす専門性を求められながらも、絶えざる組み替えに応じるフレキシビリティ（内面）と、新たな集団へと対応できるコミュニケーション（外面）の能力が重要視されるようになった。

そして、株式会社制度（有限責任性と市場公開制）と事業の連携的実現のグローバル化と高速度化の進展により、そのような人間の組織としての会社の経営に、経済的な合理性の規範からの自由を持つことがほぼできなくなってしまうという現実がある。その一方で、ハードからソフトへの財の移行に見られるような構造変化への対応のために、成員の個人的な創造性への期待が高まり、結果として社会の分極化もいつそう進行している。

今日のレジャー概念が対応すべき労働の姿は、このような場面的に変転する専門化の過程として捉えられる、徹底的な分化を特徴とするものである。

また従来レジャー論では、家庭生活をはじめ、労働の場以外の社会的な場所と時間がレジャーの発現の場と時として想定されていたが、今日の分化の徹底はそれらを巻き込むものである。生産と消費とがもはや対置的なものではなくて、訓練された消費者像こそが労働者の実像であるような社会では、自立した人間とその共同からなる社会を、どこにも見いだせなくなりつつあるのだ。

このような状況においては、“つながり”を基礎概念としてレジャー概念を作り直すべきなのではないだろうか。

つながりの意味とかたち

人間の社会のつながりの課題としてレジャー研究を捉え直すとき、生活・社会・会社・環境の統合を検討するフィールドとして、今日における住居の課題が浮かび上がる。

人の住まいと住まい方は、自然環境と技術・象徴の相互関係的な現れとして、歴史的・地域的な文化研究の対象となってきた。しかし、そのような伝統的な意味での人の住まいと住まい方そのものが、我々の現実には見いだしがたくなっているのである。

住居の材と技術は、もはや地域の自然環境とも文化とも結びついていない。経済的に最適化された、どこでもない場所で作られた部品からなる誰のためでもない建物が現出する。

今日の社会を構成するあらゆるセクターが直面している環境問題は、人間一般の生存に関わる課題であるが、その本質構造はこのような、環境を人と切り離して外化する思考傾向の問題である。表面的には、エネルギーや資源のような自然科学的・技術的課題と見えるが、問い直すべきは、環境を開発からみての外部世界としてみなしてきたことである。

また環境と材との連関は、技術だけでなく意味付けのレベルでもつながっている。例えば住宅は、私有される境界の内部が単独としてあるのではなくて、道路や広場のような共有されるもの、あるいは入会地との関係でその実質が成立してきた。それは私有地面積と共有地・入会地の資源としての持ち分の足し算によって、個々の住宅価値が計算されるということではない。共有されているのは共同体の資産ではなくて、何を何としてみなすのかという文化的な土台であり、それによって住宅は固有の場所となるのだ。都市とはそのような象徴の体系の空間的活動であって、単なる空間を場所として充実させる、文化的メカニズムの総体である。

しかし今日の生活空間は、住宅パッケージとして計画、生産、供給、消費され、まさにモノとして単独に宙に浮いているがごとく存在している。無基底主義的な現代の都市に、もはや場所性を生み出す象徴の原理としての都市性はみられなくなっている。またその原因を、政府の住宅計画の欠陥や住宅産業の経営計画の営利主義に見いだすことも現実的ではないだろう。両者ともに、法律や合理性の原則によってがんじがらめになっているだけでなく、社会的分化の構造のうちで全体を捉える枠組みから疎外されているのだ。合理性は、企業を取り扱う部材・人材・仕事のつながり・評価を規格化というインターフェースで接続すると同時に、都市の文化的関連から事業空間を切断してしまっている。

このような現実を前に、今日のレジャー研究の目的を、労働との直接的対比からではなく、労働と生活・社会を貫き、環境と文化の両領域にわたる分化の傾向との対比に位置づけ直すことができるだろう。その主要な局面のひとつが、人が自分自身の住まいと住まい方を、環境と文化（象徴）との双方のつながりの再生として見直すことである。

住居は人にとって環境と象徴との両面のつながりを具体的なかたちに現実化するものであり、今日の住居はまさにその両面での分断状況をあらわにしている。住居を通じて何を手に入れるのかを問い直すことが新たなレジャーのひとつの姿となろう。

それは、自分自身の住まいを、その材料と技術の上で、環境と結びつけなおすこと。そして、自分の住まい方を、その技術と価値の上で、象徴性（地域性・文化性）というつながりとして取り戻すことである。